

楊貴妃の伝説像再考

— 日本民話と『源氏物語』桐壺巻を中心に —

史 文昊

(山本 淳子ゼミ)

目 次

はじめに

第一章 楊貴妃の死と日本における神格化

1.1 楊貴妃の馬嵬坡刑死未遂の謎と神格化

1.2 愛知県名古屋市の熱田神宮と楊貴妃護国伝説

1.3 京都府京都市の熊野権現と楊貴妃観音

第二章 桐壺更衣と楊貴妃

2.1 「長恨」の主題と悲恋物語の典拠

2.2 和漢文学の美意識の比較と対抗意識について

おわりに

参考文献

謝辞

はじめに

楊貴妃は東アジア古代史において、文学と歴史文化研究上代表的な女性貴族の一人であり、彼女の生涯は中国で広く伝わっており、その伝説は白居易の有名な漢詩「長恨歌」が描いている。また唐風文化が流行した日本の平安時代にも、貴族社会における文化に深く影響を及ぼした。

例えば、紫式部の『源氏物語』にも楊貴妃に関わる逸話があり、平安時代の文化に与えた影響がうかがえる。また日本の各地で、彼女の死の後日談について、日本のイメージに満ちた変容が様々な形で発生した。民話の表現形式にこだわらず、現代では、楊貴妃は歴史的に有名な美人というだけではない。すでに中国と日本の古代交流の象徴になって、伝奇的な生涯を通じて、女性の形象の歴史と文学における具体的な表現に、より多くの可能性をもたらした。

筆者の印象では、東アジア人は普遍的に、父権と夫権の数千年来の支配的地位のため、歴史の記録には女性の姿はほとんどない。特に女性が科挙

参加できない地域と時代には、権力者と結婚すること以外に出世する方法はほとんどなかった。その意味では楊貴妃は玄宗と結婚し、実際に出世したわけである。しかし、帝王の妻になっても幸せになれるとは限らないのは、東アジアの女性の近代以前に共通する悲しみのようなものである。

クレオパトラ、小野小町と並ぶ所謂「世界三大美女」として、楊貴妃は今も日本で史学、文学の話題となる人物だ。本論では、日本で通行している楊貴妃伝説と『源氏物語』「桐壺」巻らとにおける、楊貴妃の日本平安時代のイメージの変遷を分析し、実在の女性の歴史と文学における現実的な意義を検討する。

第一章 楊貴妃の死と日本における神格化

1.1 楊貴妃の馬嵬坡刑死未遂の謎と神格化

唐暦天保14(755)年、安史の乱が勃発し、唐は繁栄から衰退へと向かう。反乱軍が長安に侵入すると、洛陽は陥落し、潼関は失われ、玄宗皇帝は重臣たちを引き連れて無様に逃亡した。翌日、逃亡隊が陝西省の馬嵬坡に着くと、同行した兵士が突然蜂起、宰相の楊国忠は反乱の最中に死亡してしまった。

次いで、蜂起した将兵は楊国忠の妹の楊貴妃に矛先を向け、彼女は馬嵬坡で亡くなった。

五代十国時代(約945年)の『旧唐書・楊貴妃伝』には、こうある。

及潼关失守，从幸至馬嵬，禁軍大将陳玄礼密启太子，誅国忠父子。既而四軍不散，玄宗遣力士宣问，对曰“賊本尚在”，盖指貴妃也。力士复奏，帝不獲已，与妃詔，遂縊死于佛室。時年三十八，瘞于馭西道側。

(大意) 禁軍の將軍陳玄礼は楊国忠と息子を刺殺後、後患を絶つために、唐玄宗に禍国の元

である楊貴妃に死を賜ることを求めた。玄宗はやむなく、遂に佛堂で縊死させる旨の指示を下した⁽¹⁾。

『旧唐書』の誤りを訂正した『新唐書』と北宋時代（約1084年）の司馬光の『資治通鑑』においても、馬嵬坡事件の経緯についての記録には、ほぼ変更は加えられていない。

このように楊貴妃は、歴史上に実在した女性として、二つの異なる時代の三冊の異なる史書にいずれもその死亡が記載されており、その死亡の事実は時間と死因を詳しく説明することができ、論争の余地がない。

しかし一方で、彼女が嵬坡で死んでではなく、日本へ行ったとする論がある。それは白居易の『長恨歌』の中の、楊貴妃の生存と海外逃亡を暗示する詩句に起源をもつ。

馬嵬坡下泥土中，不見玉顏空死處
 （書き下し文）馬嵬の坡下 泥土の中 玉顔を見ず 空しく死せし處⁽²⁾

この文は楊貴妃の遺体が消え、死んでいない可能性があることを示している。このことは、詳細には楊貴妃が死亡していないことを示していると言える。

中国の研究では、『長恨歌』で唐の玄宗皇帝が楊貴妃を改葬しようとしたとき、馬嵬坡の地面を三尺（約90.9センチメートル）も掘ってみたが、彼女の遺体は見つからなかったと読解できるという⁽³⁾。遺体が発見されなかったということは、つまり、楊貴妃は死ななかったということである。

上知不免，而不忍見其死，反袂掩面，使牽之而去。

（大意）玄宗は楊貴妃の死を防ぐことができないことを知っていたので、袖で自分の顔を覆い、使者に彼女を連れて行かせた⁽⁴⁾。

上記のように、後に記す『長恨歌伝』も、楊貴妃は使者に連れ去られて隠されたと暗示している。

また『長恨歌』は次のように、楊貴妃はすでに海上＝海外で生活していることを示している。

忽聞海上有仙山，山在虚无缥缈間。樓閣玲瓏五云起，其中綽約多仙子。中有一人字太真，雪膚花貌參差是。

（書き下し文）忽ち聞く海上に仙山有りと 山は虚無缥缈の間に在り 樓閣玲瓏として五雲起り 其中の中綽約として仙子多し 中に一人有り字は太真 雪膚花貌参差として是れなり⁽⁵⁾

現実主義の詩人白居易は写実的なイメージが有名で、当時の流行を牽引する詩人であった。そのため、『長恨歌』は楊貴妃に対して、以前に増した多くの追懐を引き起こした。唐代だけでも、白居易の親友であった陳鴻が『長恨歌』に『長恨歌伝』を書き添えて、楊貴妃は死ななかったことも暗示した。

歌既成，使鴻伝焉。世有所不聞者，予非开元遺民，不得知。世所知者，有玄宗本記在，今但伝長恨歌云耳。

（書き下し文）歌既に成り、鴻をして伝えしむるなり。世に聞かざる所は、予、開元の遺民に非ざれば、識ることを得ず。世に知る所は、『玄宗本記』の在る有り、今但だ『長恨歌』を傳ふと云うのみ⁽⁶⁾。

白居易は『白氏文集』の編纂において、『長恨歌伝』を『長恨歌』の前に付した。すなわち、この文をここに置くことで、白居易は、『長恨歌』と『長恨歌伝』はどちらも『皇史』とは違う隠された歴史を伝えようとする意志の元に書かれたものと述べているわけである。

また、楊貴妃と同時代人で詩聖と呼ばれる杜甫は、安史の乱の最中に、『哀江頭』という詩を詠み、その中で「明眸皓齒今何在（明眸皓齒今何くにか在る）楊貴妃は、行方不明になっているのだ」と、当時の人が考えていた事をうかがわせる文章を残している。すべての文字が同じ方向を向いているということは、楊貴妃が本当に死んだのではなく、唐を去って隠遁したということである。

近代中国の学者の中では、兪平伯氏や周作人氏などが考証を行ってからは、楊貴妃は日本に逃亡したと考えられており、周作人は日本の楊貴妃墓

地を自分の目で見たと主張している。そして一部の学者は、このような楊貴妃のイメージの変化を「貴妃東渡」と呼んでいる。だが、実はこれは日本文化に内在する創造的な力によって起こる現象である⁽⁷⁾。

中国と海を隔てた日本で、最も代表的な楊貴妃関連伝説は、愛知県名古屋市の熱田神宮護国伝説と京都府京都市の楊貴妃信仰である。両者は楊貴妃の人物像の分析上、非常に大きな比較文化的意義を持っていると考えられる。



図1 「尾張名所図会－玄宗皇帝の使者が楊貴妃を迎えに来た図」（熱田神宮鳥居前・筆者撮影）

この二つの人物像の中で、楊貴妃はそれぞれ日本の護国者と西王母のような神という二つのイメージとして現れ、例外なく中国の唐時代に流行した「紅顔禍水⁽⁸⁾」のイメージとは異なり、伝奇的な色彩に満ちた肯定的評価を受けた人物になった。次の2節では日本での楊貴妃の典型的なポジティブなイメージを分析する。

1.2 愛知県名古屋市の熱田神宮と楊貴妃護国伝説

『長恨歌』『長恨歌伝』などの作品から派生した日本の「楊貴妃」人物像は、さまざまなイメージを持っているが、大部分は依然として中国の雰気⁽⁹⁾に満ちている。

鎌倉時代後期の天台宗仏教書、『溪嵐拾葉集』巻六には、「其の蓬萊宮とは我国今の熱田の明神是也。

此の社壇の後に五輪の塔婆有り。（中略）此の塔婆は楊貴妃の墳墓也」と書かれている。

またこの事から熱田大神が中国に渡り楊貴妃となったという伝説が生まれ、江戸時代の尾張名所図会にも玄宗皇帝の使者が楊貴妃（熱田大神）を迎えに来た図が描かれている⁽⁹⁾。

名古屋の地元の伝説によると、楊貴妃は熱田神宮に祀られていた熱田の神の化身で、唐の玄宗皇帝が日本を侵略しようとしたとき、楊貴妃に変装して混乱させ、侵略を阻止したという。

日本は独自の文化創造からか、楊貴妃を神の化身として再構築し、楊貴妃は元から、日本の神で、国の危機を救うために玄宗皇帝を混乱させ、日本を攻撃させないために「楊貴妃」として生まれ変わったと強調したのだった。

楊貴妃が馬嵬で殺されたとき、その魂は日本の神社に飛んでいった。今はもう存在しないが、楊貴妃の墓があったとされる祠がある。（尾崎公哉「穂波神社の歴史的考察」）

筆者は現地へ赴き調査した。楊貴妃の墓といわれる場所は、熱田神宮の清水社（お清水さま）の裏。本殿の東、また織田信長が桶狭間合戦後、奉納した信長塀の奥である⁽¹⁰⁾。

実際に清水社を調べてみたが、墓地に関する具体的な情報は何も書かれていなかった。美貌にご利益があるということだけが示されていた。水を三回かければ願いが叶うということである⁽¹¹⁾。



図2 清水社の看板（熱田神宮内・筆者撮影）



図3 伝清水社内楊貴妃の墓所(熱田神宮内・筆者撮影)

実際の墓地は清水社の水面下にあった可能性があり、遺体があったかどうかについては、実際の記録が残っていない。

しかし確かなことは、熱田神宮で発展させた護国伝説にはそれがあるということである。熱田大神とは三種の神器の一つでの草薙神剣を御霊代としてよらせられる天照大神のこと、彼女は女神で、同じ高貴な女性である楊貴妃とはつながりがあり、連想を生んだとも考えられる。

楊貴妃護国伝説に話を戻す。古代の日本は天然資源が相対的に不足している島国であり、当時の中国(唐)は世界有数の先進国として、隣国に対して潜在的な脅威を持っていたと言われている。そこで、この事実に基づいて、楊貴妃のイメージをこのように虚構化したと考えられる。

このような演出・変容は非常に日本的で、中国人の一般的なイメージでは、楊貴妃は典型的「紅顔禍水(女性は災いの元。またその禍の元凶となった女性の意)」である。一人の女性が唐の衰亡に影響を与えることはできないが、東アジア古代の普遍的価値観の中で、彼女が家父長制によって負わされた様々な「罪」が、「女性」としてのステレオタイプをさらに強固にした。

それに対して、熱田神宮の伝説は過激で刺激的なロマンティシズムを持っている。他にも多くのバージョンの楊貴妃伝説があるが、それらに欠かせない愛情要素は、ここには具体的に表れていな

いと思う。しかしこのような雰囲気は、よく見られる日本護国伝説よりも読者に新鮮味を与えている。意外な変容も「楊貴妃」のイメージに、より読者の想像をかきたてる可能性を与えている。

1.3 京都府京都市の熊野権現と楊貴妃観音

1963年、ある日本人の少女がテレビで自分の家系図や古文書を見せながら、自分は楊貴妃の子孫であると確信を持って主張し、ちょっとした騒ぎになった。(竹内義友編集の雑誌『中国』第21号)

日本では、馬嵬での刑死者は楊貴妃の身代わりであり、本人は山口県大津郡油谷町に逃れたという説がある。地元の伝説によると、首を吊ったのは女官だったとされている。軍の主将であった陳玄礼は、楊貴妃の美貌を憐れみ、殺害するに忍びず、高力士と共謀して、女官を楊貴妃の代わりに死なせる。高力士が、楊貴妃の遺体を車で運んできて、それを検分したのが陳玄礼であったため、この偽装工作は成功したのである。楊貴妃は陳玄礼の側近に護衛され、今日の上海付近を帆走しているところであった。海の漂流を経て、油谷町久津に着いたという。

日本の歴史家邦光史郎『日本史面白事典 楽しみながら歴史に強くなる本』(主婦与生活社、1979)の中には、楊貴妃は死後、山口県長門市の二尊院に埋葬されたと記されている。現地には楊貴妃の墓と呼ばれる五輪塔が今も残っている。二尊院には釈迦牟尼と阿弥陀如来の立像が祀られて、玄宗が楊貴妃を慰めるために特別に日本に持ってきたという伝説があり、今、日本の重要文化財に指定されている。

楊貴妃に関する同様の伝説や信仰は京都にもあり、やがて『源氏物語』の流行にあわせて、古代中国への関心と共に、玄宗皇帝が彼女を偲び造らせたという、女神らしい観音である楊貴妃の像が大人気となった。民衆は楊貴妃観音に財富と美貌を祈る。民間では、このように楊貴妃観音を人々の願いを守る存在として見ることができるのは、珍しいことではない。

京都の泉涌寺にこのような楊貴妃観音がある。日本各地に伝わる楊貴妃と関係があると言われていいる。人々は、財富と美貌を祈願するだけでなく、楊貴妃観音像に出産祈願することもある。自分の

子供がない楊貴妃自身にとっては信じられないことだろう。

この観音像は泉涌寺の一番正門に近いところにある。観音像の実際の制作年代は中国南宋時代と考えられ、月輪大師の弟子である湛海律師が、建長7年（1255年）に南宋から持ち帰ったものである。以後700年のあいだ秘仏とされていたが、1955年（昭和30年）から一般に公開されている⁽¹²⁾。

観音像の、宝相華唐草透かし彫りの大きな宝冠には、カラフルな色彩が残り、頭髮にも極楽の花である宝相華が飾られている。さらに手にも宝相



図4 楊貴妃観音像所在の観音堂（泉涌寺内・筆者撮影）



図5 楊貴妃観音像（泉涌寺解説パンフレット・筆者撮影）

華を持って、顔立ちは日本の仏像にはないエキゾチックな造形であり、面長で目鼻立ちが美しく彫りが深い、そして写実的な彫刻⁽¹³⁾となっている。

観音像は三重から伝わってきた貴妃信仰と深い関係があると言われている。奇しくも山口県の楊貴妃伝説と呼応して、三重県の伝説の起源地も油谷と呼ばれている。

油谷には、古くから異国の神が祀られた形跡がある。それをうかがわせる代表的な伝説の一つが、「五衰殿ごすいでんの女御」である。以下にその現代語訳を記す。

油谷の熊野の神の由来を伝える物語である五衰殿の女御で、天竺にあるマガタ王国の美しい王女が熊野の神となった。

「昔、天竺（今のインド）のマカダ国に善財王という王様がいた。王には千人の妃があるが、いまだ子室に恵まれぬ。五衰殿に住む女御は、千人の後のうちの一人。いまだ王から一度も訪ねてもらえないことを悲しみ、一心に十一面観音に祈った。するとその功德により、女御は王の寵愛を受けるようになり、やがて王の子を身籠った。

一方、九九九人の妃たちは、女御を激しく嫉妬してにせの占いをさせるなど、女御を陥れようとするが、なかなかうまくいきぬ。そこで妃たちは、九九九人の大女に鬼の姿をさせ、悪王子が生まれることを悲しむ神仏の使いだといって、二人のもとに乱入させる。王は仕方なく、女御のもとを去っていった。

それでもなおあき足らない九九九人の妃は、七人の武士に命じて、五衰殿の女御の暗殺をくわだてる。山の奥深く連れ出された女御は、首を斬られる直前に、王子を出産する。女御はすぐに首を落とされるが、王子は母の遺体の乳を吸い、動物たちに護られ、すくすくと成長する。三年の歳月が流れた頃、山の麓に住む知見上人が文机に経典を広げると、虫食いが文字のように見えている。それは女御の霊が虫に化身して刻み付けた、王子救出を上人に託す歌だった。

山に入った知見上人は、やがて蓮華に乗り瑞雲をともった王子を見た。王子は、これ

までの経緯を上人に伝え、ともに女御の遺体を火葬した後、山を下った。寺に入って学問を積み、やがて父の善財王と対面がかなう。王は、九九九人の妃を問い詰め、女御の首のありかを白状させ、王子と母とは、悲しい再会を果たす。しかし十一面観音の利益によって女御は蘇生し、親子三人と知見上人は、憂き国を捨てて遠く日本の熊野めざして飛び立った。家来たちも次々と飛び立ち九九九人の妃も後を追おうとするが、護法善神に大岩を投げつけられ、つぶされてしまう。マカダ国を旅立った一行は熊野に到着し、善財王が早玉宮（本地・薬師如来）、五衰殿女御が結宮（本地・千手観音）、知見上人が証誠殿大菩薩（本地・阿弥陀如来）、王子が若一王子（本地・十一面観音）となって、今もこの地に鎮座している。¹⁴⁰」

和歌山県立博物館に所蔵されている『五衰殿女御物語』絵巻は、楊貴妃伝説と非常に似ており、京都泉涌寺の楊貴妃観音説を強く支持し、楊貴妃観音に子供を求める祈願をしたことを間接的に説明するものとなっている。

今から 2200 年前の中国の秦代（紀元前 221 年 - 206 年）、秦の始皇帝は東方の仙境の長生不死薬を探すために、徐福と三千人の若い男女を東方の秘境「蓬萊」に派遣した。彼らが到着した目的地は日本の三重県熊野市で、波多須町では秦代の貨幣「半両銭」が出土したことがある。

白居易の『長恨歌』では、「昭陽殿里恩愛絶、蓬萊宮中日月長（昭陽殿では恩愛が尽き、蓬萊宮では日月が長くなった）」と、楊貴妃が馬嵬坡事件後「蓬萊」にいる可能性が暗示されている。

熊野油谷の地元神道信仰、熊野信仰では、代表的な動物は三足鳥で、中国の伝統神話では三足鳥は西王母の使者である。西王母の像石には、三足鳥のほかに九尾狐やヒキガエルなどの動物がいるが、熊野の新宮の阿須賀神社と奥熊野の玉置神社には九尾狐、神倉神社にはヒキガエルが祀られている。

中国唐代の楊貴妃に関する作品の中で、有名な文学者であり詩人の李白と杜甫の二人は、共に楊貴妃を西王母に喩えたことがある。

白居易の『長恨歌』では、道士が楊貴妃を訪問する場面がある。「轉教小玉報双成（転じて小玉をして双成に報ぜしむ）」という箇所だが、『浙江通志』には「董双成、西王母の侍女」と記載されている。

西王母は中国の道教信仰における至高の女神で、東晋（317-403 年）、葛洪は『枕中書』の中で、西王母を元始天王と太玄聖母が通気して精を結んだ後に生まれた女とし、西漢夫人と呼び、「所治群仙無量也」と記している。このことから、熊野地区には非本国の神が祀られていることが明瞭である。

熊野油谷の楊貴妃信仰は、宇多法皇が延喜七年（907 年）に熊野を巡幸し、神仏習合が盛んとなった時代に、楊貴妃が西王母の化身として神格化され、熊野地区の神明として奉納されたことに遡る。

熊野地区では、楊貴妃以前から外国人を神として祀っていたという伝説がある。代表的な物語は、前に述べた五衰殿の女御である。

同時に、『熊野権現垂跡縁起』は、楊貴妃と同じように中国から来た王子晋という外国人にも言及した：

熊野権現御垂跡縁起云。往昔、甲寅年唐乃天台山乃王子信（王子晋）奮跡也。日本國鎮西日子乃山峯雨振給。其躰八角奈留水精乃石高佐三尺六寸奈留仁天天下給 布。次五ヶ年乎經天。戊午年、伊豫国乃石鐵乃峯仁渡給。次六年乎經旦。甲子年淡路國乃遊鶴羽乃峰諭鶴羽山仁渡給。次六箇年過。庚午年三月廿三日紀伊國無漏郡切部山乃西乃海乃 北乃岸乃玉那木乃淵農上乃松木本渡給。次五十七年乎過。庚午年三月廿三日熊野新宮乃南農神蔵峯降給。次六十一年後庚午年新宮乃東農阿湏加乃社乃北石淵乃谷仁勸請靜奉津留。始結玉家津美御登申 二字社也。次十三年乎過旦。壬午年本宮大湯原一位木 三本乃末三枚月形仁天降給。八箇年於經。庚寅農年石多河乃南河内乃住人熊野部千輿定土云犬飼。猪長一丈五尺奈留射。跡追尋旦石多河於上行。犬猪乃跡於聞旦行仁、大湯原行旦。件猪乃一位農木乃本仁死伏世利。宍於取 旦食。件木下仁一宿於經旦木農末月乎見付旦問申具。何月虚空於離旦木乃末仁波御坐止申仁。月犬飼仁答仰云。我乎波熊野三

所權現止所申。一社乎證誠大菩薩土申。今二枚月乎者兩所 權現土奈牟申仰給布云々。」

(大意) はるか昔の甲寅の年、唐の天台山の地主神・王子信(晋)が飛来し、鎮西(九州)の日子乃山=彦山(英彦山・福岡県、大分県)に天降った。その体は八角形の水晶の石で、高さは三尺六寸である。

五年後の戊午の年、伊予国の石鎚山(愛媛県西条市、久万高原町)に移られた。六年が経った甲子の年には、淡路国の遊鶴羽(諭鶴羽山・兵庫県南あわじ市)の峰に渡られた。それから六年が過ぎた庚午の年に、紀伊国牟婁郡切部山の西の海の北の玉那木の淵の上の松木本へと渡られた。五十七年後、庚午の年の三月二十三日、熊野新宮の南にある神倉山に降られた。さらに六十一年が経った庚午の年、新宮の東、阿須賀社の北にある石淵谷に勧請し奉り、名を結玉家津美御子と申され、二字の社に祀られた。十三年が過ぎた壬午の年、熊野川上流・本宮おおのほらの大齋原いらいの三本の櫟の木の下に、三つの月の姿をして天降った。それから八年後、庚寅の年、石多河の南河内の熊野部千与定という犬飼の獵師が一丈五尺の大猪を追って石多河を遡り、本宮のある大齋原に行き着いた。追い求めた猪は櫟の木の下で倒れており、既に死んでいた。獵師は猪を食べた後、そのまま大齋原の櫟の木の下で一夜を過ごしていた。その晩、木の梢に月がかかっているのが見えたので、「どうして月が空より離れて木の梢にいるのか」と獵師は問い尋ねた。月は「我は熊野三所權現であり、一社は証誠大菩薩という、二枚の月は両所權現である」と答えられたという⁽¹⁵⁾。

王子晋は周靈王の太子で、笙の名手だという。若くして亡くなった後、白鶴に乗って仙人になった。董双成は王子晋と同じように笙が得意で、白鶴に乗って仙人になった。李白には董双成を詠んだ詩『桂殿秋』がある。

仙女下，董双成，漢殿夜涼吹玉笙。曲終却从仙宮去，萬戸千門惟月明
(大意) 仙女と董双成は下りて、漢殿の夜は、

涼しく、玉笙を吹く。曲が終わって、仙宮に去れば、万戸千門ただ、月明かりのみである⁽¹⁶⁾。

白樂天には王子晋を詠んだ詩『王子晋廟』がある。

子晋廟前山月明，人聞往往夜吹笙。鸞吟鳳唱听无拍，多似霓裳散序声。

(大意) 子晋の廟の前山に、月明かりがあれば、人は夜に往々にして、笙が吹かれるのを聞く。鸞や鳳凰の声のような拍子ではなく、霓裳羽衣の曲の散序に似る⁽¹⁷⁾。

白居易は李白の『桂殿秋』の影響を受け、この『王子晋廟』を創作した。そして楊貴妃の『霓裳羽衣曲』が現れた。

実際は、王子晋は董双成と同じように、『漢武帝内伝』では西王母侍女の「王子登」という人物像として伝えられている。李白の詩も白居易の詩も当時の貴族たちは知っていたはずだが、王子晋が西王母の侍女であれば、王子晋が熊野権現縁起で登場し、熊野に祀られている神が西王母(楊貴妃)であることを暗示していたと言える。

つまり、京都の泉涌寺楊貴妃観音は、熊野油谷の楊貴妃信仰と中国の伝統的な西王母信仰を結びつけ、他国の貴族が日本で観音になったという伝説を加えた、諸種の観念が入り混じった産物である。

第二章 桐壺更衣と楊貴妃

2.1 「長恨」の主題と悲恋物語の典拠

唐暦元和元年(806年)、白樂天は陝西省盩厔(今の西安市周至県)の県尉⁽¹⁸⁾を務めていた。ある日、友人の陳鴻、王質夫と馬嵬駅近くの仙遊寺を訪れたとき、玄宗と楊貴妃の話になった。王質夫は、「このような大事件を良い文章で巧みに飾らなければ、人々の記憶は時間とともに消失してしまう」と考えた。

彼は白樂天を励ました、「樂天は、叙情詩が得意だから、こんな物語を書いてみてはいかがでしょう」(樂天深于詩，多于情者也，試為歌之，何如⁽¹⁹⁾)、そこで、白樂天はこの長い漢詩を書いた。

最後の二行の「天長地久有時尽、此恨綿綿無絶期」から、『長恨歌』はそう名づけられた。詩名は「長恨」であり、中国語の文脈からいえば、綿長な遺恨（残念）を意味する。

古来、『長恨歌』のテーマは、〈語られる志〉と〈伝えられる情〉の二つがあり、つまり実質的には『長恨歌』の二重テーマという問題で論争を呼んでいる。その論争については、中国の学者達には様々な意見があるが、一般的には、一つ目は玄宗の蒙昧と奢靡を暴露するいわゆる「風刺暴露説」、二つ目は玄宗と楊貴妃の愛情を謳ういわゆる「愛情主題説」、三つ目はこの二つの意見の折衷である、いわゆる「風刺と愛情の二重テーマ説」などの見解があるとされる。

筆者は『長恨歌』の〈語られる志〉は、玄宗と楊貴妃の愛情の顛末に対する叙述を通じて、ある程度唐の盛衰からの問題点を明らかにし、白樂天が皇帝を強く熱望し、それを婉曲に表現したと考えている。〈伝えられる「情」〉は、明らかな李（玄宗）、楊の恋の部分である。

『長恨歌』の創作時期、白樂天の思想態度、詩の中で強調された時代背景と全詩の主な傾向から見ると、時明時暗の風刺詩である。『長恨歌』は『観刈麦⁽²⁰⁾』、『秦中吟⁽²¹⁾』、『新樂府⁽²²⁾』と同じ時期の作品である。この時期は白樂天が初めて官職に就いた最初の数年であり、まさに彼が朝政の腐敗と官僚の卑劣さを深く感じ、国と民生のために心配していた時期であり、これによって唐に報いることを企み、「兼善⁽²³⁾」の大願を実現しようとした積極的で力強い時期でもあった。

そして白樂天自身は、『長恨歌』を自分の別の風刺作品と同列に論じたことがあり、彼を「富貴」「無份」にできないが、「身後有名⁽²⁴⁾」にすることができる社会的意義のある作品でもあると考えている。このような歴史的的重大事件に関わる力作は、本人の風刺の意味を超えたり、少なくともしたりすることができるかもしれない。しかし、彼が書いたのは一般的な社会現象ではない。彼は直接宮廷に深く入り込み、皇帝本人をはっきりと書いているし、唐の汚点と言える社会動乱にも触れているので、率直な手法では創作できない。

勿論、『長恨歌』の中で唐玄宗をあまり深く書いていないし、安史の乱の成因をさらに徹底的に明

らかにしてもいない。それは白樂天の時代・階級の限界によるものだけでなく、彼が玄宗の前期の業績を尊重しているためであり、しかも彼はこの時期の唐の王室に希望と幻想を抱いていた。だから『長恨歌』の玄宗の部分は、暴露というには大きな保留があり、白樂天が書いた玄宗も私生活の側面に発展し、「忠節専一」と多情な男性人物像になった。

彼は後に『与元九書』の中で、次のように記している。

今僕之詩、人所愛者、悉不過雜律詩与『長恨歌』一下耳。時之所重、僕之所軽。

(大意) 今僕の作品で、みんなが好きなのは、雜律詩や『長恨歌』で言う軽いラブストーリーにすぎない⁽²⁵⁾。

つまり、白樂天は他人達が『長恨歌』を男女のラブストーリーとして読むことに満足していない。彼は「愛情至上」の観念を宣伝しなかった、安史の乱による政局危機の由来を書いていた。

男女間の愛情については、『長恨歌』の中で政局危機との因果関係を具体的に明確に表現する。白樂天が李、楊の愛情を誇張するのも、彼らのより深い罪を間接的に暴露することである。

しかし筆者は、『長恨歌』の最も成功したところは叙情の部分と考える。かなり複雑なストーリーは洗練された一言で過去を説明し、感情の可視化に力を入れ、楊貴妃死後、李、楊の互い思い合う気持ち丁寧に書いた。

『長恨歌』は「長恨」を歌っており、そして「長恨」は全編のテーマとストーリーの焦点である。「恨」とは何か、なぜ「長恨」なのか、白樂天は直接述べるのではなく、詩歌化された物語を通じて、読者に次々と問いかけている。

全編の中心は「長恨」を歌うが、白樂天は「重色」から語り、「日高起」、「不早朝」、「夜専夜」、「看不足」などと、喜劇のように極楽になったようだが、その極楽の後ろに裏返して、尽きない恨みを記している。

さて、『源氏物語』桐壺巻も。ストーリーの根柢として、全巻のテーマを「長恨」という二字でまとめることもできる。

桐壺更衣は身分が卑しいため、帝の寵愛を一身に集めると、後宮の妃たちの嫉妬を受ける矢面に立たされた。このところで、帝と桐壺更衣は、玄宗と楊貴妃に対する関係のように見える（后宮佳麗三千人、三千寵愛于一身）。后妃を寵愛し過ぎたことから朝廷の公憤を引き起こしたのは、『長恨歌』と同じである。

桐壺更衣は病患で死亡し、楊貴妃とは異なるが、帝が最愛の妃を失った後の哀しい場面の描写は『長恨歌』のストーリーに対する模倣と表現手法の踏襲とも言える。

太液の芙蓉・未央の柳も、げに通ひたりし容貌を、唐めいたる装ひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。朝夕の言種に、「翼をならべ、枝を交はさむ」と契らせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ、尽きせず恨めしき⁽²⁶⁾。

「太液の芙蓉、未央の柳」は「太液芙蓉未央柳」の直訳である。玄宗は絵の中の芙蓉と楊柳を見て、楊貴妃を思い出し、愛する人を失った後の空虚な心を慰めた。紫式部はこの部分のプロットを帝と桐壺更衣の間に直接運用し、帝は玄宗にならって、屏風の絵を通じて亡くなった更衣を追憶して慰めた。

副次的な人物の描写には、両者にも類似点がある。『長恨歌』では、楊貴妃が死んだ後、唐玄宗が彼女を日夜懐かしんでいたのも、ある道士が楊貴妃を探しに行った。

臨邛道士鴻都客，能以精誠致魂魄。為感君王展轉思，遂教方士殷勤覓
（書き下し文）臨邛の道士 鴻都の客 能く精誠を以て魂魄を致す 君王の展轉の思いに感ずるが為に 遂に方士をして殷勤に覓めしむ⁽²⁷⁾。

『桐壺』巻では、偶然にも同じ相士（相人）が、更衣の死後に現れた。

そのころ、高麗人の参れる中に、かしこき相

人ありけるを聞こし召して、宮の内に召さむことは、宇多の帝の御誡めあれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館に遣はしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人驚きて、あまたたび傾きあやしふ。『国の親となりて、帝王の上なき位に昇るべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷の重鎮となりて、天の下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし』と言ふ⁽²⁸⁾。

叙情部分の手法についても、『長恨歌』と桐壺巻は其々異なるところが、各自の国の特色に満ちている。

『長恨歌』は白楽天が史実をベースポイントにして、「情」の発生発展に基づいて、李、楊二人の民間伝説と正史中の人物像を結合し、自分の審美観念と創造思想に土台として書く。特殊な環境条件の下で、特殊な性格を示す二人の人物の形成に大成功した。李、楊のラブストーリーを借りて、激動の時代に、自分自身と庶民達の理想的愛情への憧れを託した。そのため、『長恨歌』では、前の部分は現実主義の人事を主とし、最後の部分はロマン主義的な情理にかなったフィクションを主としている。全編の創作方法はリアリズムとロマンティズムを融合させて、さらに「物感⁽²⁹⁾」を備え、詩歌創作の教化作用と社会機能を強調している。

紫式部は文学の真実性を維持し、作品を通じて現実生活の様々な人情を反映している。桐壺巻の中で、日本伝統の写実的スタイルを貫き、帝と桐壺女御の間の愛情を表現した。中国の学者葉渭渠氏は、「紫式部の文学観は、日本の伝統的な写実的な「真実とロマン的」物哀の基礎の上に構築され、同時に中国文学、特に白詩の理念と方法を大量に吸収し、そして両者を適切に調和融合させ、それによって独自の文学的性格を形成する」と考えている。

日本の平安文学研究者山本淳子『平安人の心で「源氏物語」を読む』は、『源氏物語』の主人公光源氏の母、桐壺更衣のモデルは、作者紫式部の同時代人である一条天皇の中宮定子という。定子は清少納言が仕えた女主人で、紫式部が仕えた女主人、中宮彰子とは一条天皇の寵愛を競い合う関係

があった女性である。

平安時代の天皇の婚姻は、一夫多妻制である。これを私たちは「英雄色を好む」と受け取りやすい。権力があるから次々と妃たちを娶って、よりどりみどりで相手をさせているのだろうと。(中略)しかし、それは思い違いだ。

天皇自分自身の「性」と「結婚」は政治に結びつかなければならない、つまり天皇には自ら選択する権利もない。それだけではない。

子だくさんだけでは天皇として不合格だ。跡継ぎとは次代の天皇になる存在なのだから、どんなきさきの子でもよいというわけではない。即位の暁には貴族たちの合意を得て円滑に政治を執り行うことができる、そんな子どもをつくらなくてはならない。それはどんな子か。一言で言えば、貴族の中に強力な後見を持つ子どもである。ならば天皇は、第一にそうした跡継ぎをつくれる女性を重んじなくてはならない。個人的な愛情よりも、きさきの実家の権力を優先させることが、当時の天皇の常識だった。…天皇にとって愛や性は天皇個人のものではなかった。最も大切な政治的行為だったのだ⁽³⁰⁾。

数多くの『源氏物語』の中国人読者は、日本語のいくつかの名詞が中国古代の後宮や政治に似ているため、ついつい自分自身がよりよく知っている中国の歴史、文化などを代入して理解しようとして、結果的バイアスをもたらした。しかし根本的に、中国古代の君主が政治的に実権を持っていたのに対し、日本の平安時代は摂関政治を施行しており、天皇の権力は架空であり、政治的実権は外戚が握っていた。

「摂関政治」は「摂政」と「関白」の両役職の総称で、天皇の代理人や補佐役にあたる。この代理人は天皇が成人するまでは「摂政」と呼ばれ、天皇が成人すると「関白」と呼ばれるが、本質的には変わらない。朝廷の権力を独占する外戚による国政干渉である。大権は外戚にあり、天皇は傀儡のような存在であるだけに、政争の激しさがうか

がえて、『源氏物語』の中の天皇達は、いずれも退位が早い。

「摂関政治」が後宮に及ぼした影響は、朝廷の大臣たちが必死になって自分の娘を後宮に押し込み、息子を産んで次の天皇に封ぜられれば、天皇に退位を迫り、孫を扶けることができるというものである。このような背景の中で、桐壺帝の愛情は非常に危険な状態である、玄宗と同じく、愛するきさきの命を守ることができなかった。

『源氏物語』が書かれる直前、時の一条天皇には心から愛する中宮定子がいた。『枕草子』の作者・清少納言が仕えた、明るく知的な中宮である。だがその家は没落していた。そこに入内してきたのが、時の最高権力者・藤原道長の娘で、やがては紫式部が仕えることになる彰子である。定子は23歳、天皇は20歳、そして彰子自身はまだ12歳(筆者注・いずれも数え年)。年の差もあって気が進まない天皇だが、道長や貴族たちの手前、定子よりも彰子を重く扱わなくてはならない。その苦しい胸の内は貴族たちの日記や『栄華物語』『枕草子』などから知ることができる。結局定子は翌年、息子を遺して亡くなった。

(中略)

『源氏物語』の執筆が開始されたのは、この出来事のわずか数年後だ。いうまでもなく、桐壺帝は一条天皇に、桐壺更衣は定子に酷似している。…遺児の光源氏を天皇が溺愛し後継にしたいと願ったことも、定子の遺した息子・敦康親王に対して一条天皇が抱いていた願いと同じだ。物語を書き始めた時、紫式部はまだ彰子に仕えていない。一個人の立場から、ドラマチックな史実を効果的に掬いあげて、この物語を構成したのだ。だがそれは面白さを狙っただけではない。一条天皇の苦しみは、一人の男性として抱く愛情と、天皇として守るべき立場とに挟まれての人間葛藤だった。紫式部の描く桐壺帝も、実に人間的だ。人間を見据え、天皇という存在までもリアルに描く。それが『源氏物語』だといえるだろう。こうした『源氏物語』は、定子を悼み天皇の心を癒やす力をも持っていた。当の一条天皇が

やがて『源氏物語』の愛読者となったこと、これは紫式部自身が『紫式部日記』に記している⁽³¹⁾。

つまり、桐壺巻は、『長恨歌』の枠組みを踏襲しながらも、それなりの日本の民族性を保っている。すなわち「物感」に対する「物の哀れ」である。物の哀れは平安時代の王朝文学を知る上で重要な文学的・美的理念の一つ。折に触れ、目に見、耳に聞くものごとに触発されて生ずる、しみじみとした情趣や、無常観的な哀愁である。苦悩にみちた王朝女性の心から生まれた生活理想であり、美的理念であるとされている。日本文化におけるの美意識、価値観に影響を与えた思想である。江戸時代後期の国学者本居宣長が、著作『紫文要領』や『源氏物語玉の小櫛』などにおいて提唱し、「物の哀れ」の頂点が『源氏物語』であると規定した⁽³²⁾。

「物の哀れ」の思想は『源氏物語』ひいては平安文学全体の基調を定めた。桐壺巻が中国の漢文詩歌の内容を根拠に日本的加工と二次創作を行ったのは、「物の哀れ」は肉付けであり、魂は『長恨歌』から始まったと言っても過言ではない。

2.2 和漢文学の美意識の比較と対抗意識について

各自の国には各自の文化があり、異なる文化体系が各々の独自の美意識を生み出している。美意識は人間の具体的な生活実践のなかで自然に生まれるものであり、明確で体系的な理論的表現は欠けているが、非常に重要である。文化の重要な部分として、美意識はその国の国民性を反映している。中国と日本も同じで、古くから文化などで影響し合ってきた二つの隣国として、日中両国の美意識は相通ずるところもあれば、相違するところもある。人間の文化において、人々の生活の美意識をもっとも鋭く反映しているのは文学である。日本民話や『源氏物語』桐壺巻における人物像の様々な変容については、本論でも前に論じた。それにより、和漢文学との審美的比較と対抗意識について考えてみたい。

楊貴妃のあった盛唐時代をはじめ、この時代の絵画、彫刻、埴輪、様々な芸術作品が表現する女性像に、唐の女性は「豊肥濃麗⁽³³⁾」という印象を与える。唐人の女性の美意識は、その時代までの華

奢過ぎる体つきから一転して、健康的で豊かな状態に変わったと考えられている。しかし、当時の老荘思想や道家「房中術⁽³⁴⁾」観念の盛んさから、豊満な体型の女性は生産能力が優れていると考える人が多く、豊満な女性は盛唐ではよく見られた。

又は、服のファッションや装飾において、華やかさと濃艶さを重視する。白楽天『長恨歌』において楊貴妃の美貌を形容するに「太液芙蓉未央柳（太液の芙蓉未央の柳）」というものがある。芙蓉と柳はいずれも中国の文化では「濃艶」のイメージである。

それに対して、紫式部の『源氏物語』が置かれている平安時代の美意識は、ある意味の対抗感を持っている。平安文学の研究者上野英二は、このような和漢対抗意識が桐壺巻に表れていると考えて、『源氏物語』の注釈書を引用する⁽³⁵⁾。次にその箇所を掲げる。

太液池に咲く蓮の花、未央宮前の柳の葉、その花は楊貴妃の顔に、その葉は眉を思わせる、と長恨歌には歌っている。それはそうであろう、詩人のいうとおり美しい器量ではあったろう。が、着ているものが唐の衣裳。それでは立派ではあっても近よりがたい感じがする。それに反して、わが桐壺は、やさしい心の、だきしめたい感じのする人であった。愛することのできる人、日本人であった。その人は、太液の芙蓉や未央の柳にたとえられない。いな、ありとあらゆる花の色、ありとあらゆる鳥のねにも、あれを思わすものはない。作者は、かえの限界を指摘し、日本人には日本人の美があることを強調する。日本式文化の独立を主張するのである。（玉上琢彌『源氏物語評訳』「桐壺」）

このような研究界の論調に代表されるように、紫式部は白楽天の忠実な愛読者であるが、依然として桐壺巻には日本らしい独特の美意識が主張されている。

『長恨歌』は本質的に劣悪な史実を大きく美化している。神田秀夫「白楽天の影響に関する比較文学的一考察」（『古小説としての源氏物語』明治書院、1984年）は「長恨歌には醜悪に対する美化法

が徹底的に採られる」として、『長恨歌』と「出典史料の差」を次のように列挙して、その「美化法」について指摘している。

- 1、『長恨歌』には楊貴妃が先夫・玄宗の子寿王があることを書かない。
- 2、玄宗は楊貴妃の前に他の寵妃がいたことを書かない。
- 3、安祿山と楊貴妃とのキャンダルに触らない。
- 4、玄宗が楊貴妃に死を賜った場面は書かない。
- 5、楊国忠（楊貴妃の兄弟）以下の横暴を具体的に書かない。
- 6、楊貴妃自分自身の心理を書かない。
- 7、楊貴妃が玄宗を翻弄し榨取し利用し尽したことは書かず、玄宗が自分の息子の妻を奪ったことは書かず、白楽天はこの関係を「純愛」と表現する。

しかし桐壺巻において桐壺帝と桐壺更衣は略奪の関係ではなく、実在の「純愛」である。「超政治性」を持っている。

中国の伝統文化の根幹が儒教文化であることは疑う余地がない。儒教は現実社会に関する理論哲学であり、「入世⁽³⁶⁾」と「修斉治平⁽³⁷⁾」を主張する。古代中国の社会風土は功績を立てることを最高の目的とした。このような環境での文学は、人生や政治などの社会問題を離れてはほとんど語ることができない。それゆえに、『長恨歌』は、李、楊のラブストーリーによって政治を風刺し、後世の君主に警鐘を鳴らした。

『源氏物語』に代表される日本文学は、中国文学の「文以載道⁽³⁸⁾」とは大きく異なる。現代においても、政治を文学に代えることは低俗とみなされる。このような性格は、世界の文学の中でも珍しい⁽³⁹⁾。

前文に述べた「物の哀れ」を切り口にしたのは、明らかに中国の唐代文学に刺激されて形成されたものであるが、日本民族自身の美意識と意識の根幹がないわけではない、中国文学の中のいくつかの要素を選択的に受け入れ、発揮し、拡張し、いくつかの面では中国文学とは異なる方向に独特の引用をした⁽⁴⁰⁾。

平安時代に白楽天文学が大流行した原因は4つ

である。

- 1、時代背景が似ている。
- 2、白の身分地位が平安時代の文人に似ている。
- 3、白の個性と趣味が当時の日本人に近い。
- 4、『白氏文集』の叙情部分が平安時代の美意識に合っている。

しかし『白氏文集』の中で中国人にエッセンスとされている風刺詩の部分に対して、日本人はあまり熱心でなく、日本の高校国語テキストには「心泰身宁是帰処、故郷何独在長安（心泰く身寧きは是れ帰する処 故郷 何ぞ独り長安に在るのみならんや⁽⁴¹⁾）」を収録した。このような文句が中国のテキストに載っていたら驚くべきことである。その理由は、中国の文学的な美意識において、「出世」が「感情」より優先的と考えられ、そして、その順位は今も変わっていないということである。

美術史学者千野香織は「平安時代の人々は自分自身のアイデンティティを模索し続け、「唐」という偉大な存在を十分に意識しながら、彼らが選んだのは、「唐」に相対の道を選ぶ」という観点⁽⁴²⁾を提唱し、又は、「唐（漢）」と「和」の二つの文化体系をジェンダーの視点で分析し、唐＝公＝男性的イメージ、和＝私＝女性的イメージを指摘した。

『源氏物語』の時代背景を見ると、一方では、「唐風文化」の延長として、中国と漢文は依然として権威であり、中国の詩文は公式の正統な学問である、男性貴族には必須の修養である一方、「女性」が発展し、成熟していくのに加えて、作者の紫式部は女性として、仮名や和歌などで構成された「和」の世界にあることから、作品は女性の生活と密接に関連した「和」に注目するようになった。「唐（漢）」の尊崇と「和」への関心の中に、「源氏物語」特有の和漢対比と対抗意識が形成されている。

おわりに

楊貴妃は中国の歴史上有名な美人というより、文化的記号になっている。彼女といえば、「紅顔禍水」、「妃子笑荔枝⁽⁴³⁾」、「安史の乱」という歴史的名詞を連想するに違いないが、それと同時に、一

女性としての彼女の真の姿は曖昧化してきた。

学界でも文化界でも、東アジアで発言権を持つ集団はこれまでも男性である。そんな立場から見ると、多くの問題の観点は男性からの凝視に満ちていて、「意淫⁽⁴⁴⁾」を伴うことさえ避けられない。

白楽天が『長恨歌』を書いた背景の一つは、彼の少年時代、故郷の河南新鄭で戦争が起こり、父親・白季庚が戦乱を避けて家族を宿州符離に連れてきたことにある。その間、隣家に湘霊という女の子がいて、可愛くて音律も知っていて、二人は幼馴染になった。白楽天が19歳、湘霊が15歳の時、二人はお互いに初恋をした。

しかし二人の恋愛は、家族によって妨げられた。白楽天の母親は二人の身分が違うとして、結婚に強く反対した。そこで彼は母親の取り決めた縁談を断り、貞元十四年(798年)符離を離れて叔父の許に身を寄せた。時に二十七歳であった。

貞元二十年の秋、三十二歳の白楽天は長安で正九品官人校書郎⁽⁴⁵⁾となり、本格的な官吏生活を始め、家を符離から長安に移した。彼は再度母親に、自分と湘霊との結婚に同意してくれるように頼んだが、母親は再び、強く反対した。白居易は孝行息子であり母親の断固たる態度に対しては抵抗できない。彼は、自分と湘霊との結婚することが、もはや二度と実を結ばないことを知っていた。それから2年後の元和元年(806年)に白楽天は『長恨歌』を書いた。

白楽天の波乱万丈な感情の経験は彼に玄宗と楊貴妃の恋愛悲劇に共感を抱かせた。彼の「恨」は李、楊二人が永遠に別れることにあった。つまり彼は湘霊と一生付き合えないことを恨んでいたのである。作品は玄宗を皮肉っているが同時に自分自身をも皮肉っている。玄宗を風刺して恋の悲劇を生み出したが、彼自身も恋の悲劇を止めることはできなかったようである。

玄宗は賜死楊貴妃の強い要求に面を隠さなければならず、「掩面救不得⁽⁴⁶⁾」である。白楽天自身も母親の反対に直面してどうすることもできなかった。彼は精神的な共感を見出し、彼らには共通点があると感じ、その後悔を埋めるために「臨邛道士」がいることを願い、そして誰かが彼を助けてくれることを願った。「在天願作比翼鳥，在地願為連理枝。天長地久有時盡，此恨綿綿無絕期」(天に

在りては願はくは比翼の鳥となり 地に在りては願はくは連理の枝とならんと 天長く地久しきも時有りて尽くるも 此の恨みは綿綿として絶ゆる期無からん)という言葉は、白楽天が湘霊に送ったものと考えられる。

同じような筋書きが、『源氏物語』桐壺巻にも現れている。つまり、桐壺更衣の意思が見えないで、男性の視線で描かれている。一見すべてが順当なように見えるが、また日中文学界で流行している理論であることは確かだが、筆者の現代女性としての立場からは、楊貴妃や湘霊、さらには派生した架空の人物、桐壺更衣の立場に立ってみると、壮大な歴史観の下では、女性のアイデンティティはむしろ曖昧な道具のように感じられる。

本論中で唯一女性であり、創作者の立場に立つ紫式部。彼女の感情的な経験も波乱に満ちていた。二十代の中頃に結婚。夫・藤原宣孝との間には、一人娘が生まれた。宣孝は紫式部よりかなり年長のうえ、式部は正妻ではなく、他にも多くの女性との恋愛があったため、結婚生活は円満なものではなかった。その後紫式部が出会った藤原道長は、教え子である彰子の父親であると同時に雇い主でもあった。彼らのスキャンダルは今も広く伝えられているが、確たる結論は出ていない。

作品や男女関係の有名さよりも驚くべきことは、紫式部の本名がいまだに謎に包まれていることである。たしかに古代の東アジアでは、女性は様々なルールに縛られ、平安時代には漢字を使ってはならなかった。家父長制の規訓は女性を付属物のように扱う。紫式部が『長恨歌』を借りて桐壺巻を書いたということは、自分のいる時代に対する皮肉である。

女性が家族にとって必要な時には、彼女は家父長制社会の「紅袖添香⁽⁴⁷⁾」になって、必要でない時には、生命を権力と引き換えにされる、また婚姻という形で売買される。筆者は「愛情至上」主義を信奉しているわけではないが、白楽天や玄宗、桐壺帝には悲劇を起こさせないチャンスがあった。しかし、権力や官吏としての登用の道などと比較した結果、彼らが最初に放棄したのは、最も取るに足らないように見える「女」である。その結果、湘霊の青春、楊貴妃と桐壺更衣の自我は蹂躪された。

ところが、日本の各地で楊貴妃の人物像は変容した。それはある意味サプライズであり、彼女に押し付けられた「紅顔禍水」という典型的なイメージを払拭した。伝承の中では、楊貴妃は女性として護国伝説のヒーローになり、庶民を庇護する神になることもできる。読者に無限の可能性を与えると同時に、女性というアイデンティティも反映されており、家父長制中心の社会では、次第に肯定的なイメージを持つことができる。

現代社会では、男女平等が話題になりつつある。女性も男性に従属的ではなく、東アジア地域の女性意識も徐々に台頭し発展している。文学によって体現される新しい女性像と新しい社会的議題を期待する。

謝 辞

本論文を進めるにあたり、山本淳子教授には、指導教員として終始熱心なご指導を頂きました。心から感謝いたします。また、温かいご助言を頂いた本学科の先生達、先輩達も大変お世話になりました。お礼申し上げます。

最後に、夢のような学部四年間を拙句で結末させていただきます。

令和五年元月九日天神川畔書

凜冬夜読『別董大』京洛深寒風颯颯。

故人魂夢三千里，独我走筆又一夕。

寄何事？何事寄？古今几多傷別离。

「莫愁前路无知己，天下誰人不識君。」

注

- (1) 出典一『旧唐書』「楊貴妃伝」
- (2) 出典一『白氏文集』巻12感傷4「長恨歌」
- (3) 中国の研究者・俞平伯『長恨歌伝の疑惑』(1920年)の観点
- (4) 出典一『長恨歌伝』
- (5) 出典一『白氏文集』巻12感傷4「長恨歌」
- (6) 出典一『長恨歌伝』
- (7) 「日本文化具有根据特定の歴史条件和時代背景，在适当的时机自我革新，再生的特質。(日本文化は、特定の歴史的条件や時代背景に依じて、適切なタイミングで自己革新し、再生することができるという特質を持っています。)」日本宗教文化史研究. 日本宗教文化史学会. 編8(1), 71-91, 2004-05. 「豊臣政権期の日本外交文書における『神道思想』の展開と革新」. 莊佩珍
- (8) 紅顔禍水、あるいは禍水とは、女性を男性の名誉、金銭、地位、家庭の損失、さらに、戦乱を引き起こし、亡国を促すなどの重大な災いの原因とすることを指す。「紅顔禍水」はいつも美貌が抜群で才能があふれているが、結末は往々にして悲惨である。この現象は発言権を握る男性が女性に極端に依存し、恐れを抱き、極力制御しながら期待している矛盾した心理を体現しているという
- (9) 「尾張名所図会－玄宗皇帝の使者が楊貴妃を迎えに来た図」(熱田神宮鳥居前・筆者撮影)
- (10) 清水社の看板(熱田神宮内・筆者撮影)
- (11) 伝清水社内楊貴妃の墓所(熱田神宮内・筆者撮影)
- (12) 楊貴妃観音像所在の観音堂(泉涌寺内・筆者撮影)
- (13) 楊貴妃観音像(泉涌寺解説パンフレット・筆者撮影)
- (14) 出典一『神道集』巻二の六「熊野権現の事」・現代語訳・西尾光一・貴志正造 編. 『鑑賞日本古典文学』第23巻「中世説話集 古今著聞集・発心集・神道集」. 1977. 角川書店
- (15) 意識部分引用一仏教研鑽サイト：<https://buddhist-study.jimdofree.com/>. 「熊野権現御垂迹縁起」と「熊野権現金剛蔵王宝殿造功日記」. 林信男
- (16) 出典一『李太白集』「桂殿秋・仙女下」
- (17) 出典一『白氏文集』巻58「王子晋廟」(2827番)
- (18) 尉は古代中国で軍事と警察をつかさどる官職の名。地方各県の警察を担当する官は県尉など
- (19) 出典一『長恨歌伝』
- (20) 白楽天の初期作品。内容は麦の収穫時の農繁期の光景を描写し、庶民の貧困の源となる重い租税に対して非難を提起し、自分は働かないが衣食に余裕があることに罪悪感を抱

- く、良心的な封建官吏の人道主義精神を表現した
- (21) 白楽天の組詩作品。全詩は異なる側面から当時の政治的弊害と民生の苦しみを深く反映していた
- (22) 六朝以前の楽府に対し、唐代以後の新しい楽府。特に、白楽天が、楽府は民衆の声を代弁し、為政者の参考となるべきであるとの主張のもとに五〇首の新楽府を作ったのに基づき、人民の喜怒をうたい、時弊を諷刺する楽府をさす。一寛齋先生遺稿(1821)一・三絃弾「微二白氏新楽府一、傷三俗楽壤二土風一也」〔楽府詩集 - 新楽府辞〕
- (23) 他人を利益にするという。一『孟子』卷十三「尽心上」
- (24) 白楽天は生前から自分の詩集を整理し、15巻に編纂したことを誇りに思っていた。さらに、元稹、李紳などの友人に『編集拙詩成一十五卷因題卷末戲贈元九李二十』という詩を書いた。その中で「世間富貴応无份、身后文章合有名。(世間の富貴は 応に分無かるべきも 身后的文章は 合に名有るべし)は白楽天が自分のことに関する愚痴言葉で、詩才に対する自認のように見えるが、多くの不平や辛酸も含まれている
- (25) 出典一『白氏文集』卷45「与元九書」
- (26) 出典一『源氏物語』「桐壺」
- (27) 出典一『白氏文集』卷12感傷4「長恨歌」
- (28) 出典一『源氏物語』「桐壺」
- (29) 中国の古代文学文芸理論の重要な命題の一つ、文芸の発生、文芸活動の心理的動機及び創作と鑑賞過程における主客体関係に関連している
- (30) 引用一山本淳子『平安人の心で「源氏物語」を読む』「一 平安人の心で、「桐壺」巻を読む 後宮における天皇、きさきたちの愛し方」2014. 朝日新聞出版
- (31) 同上
- (32) 引用一和辻哲郎『日本精神史研究』1992. 岩波文庫
- (33) 中国語の言葉。豊かに太った美人。
- (34) 中国古来の養生術の一種。房事すなわち性生活における技法で、男女和合の道である
- (35) 論点引用一上野英二『「源氏物語」と「長恨歌」世界文学の生成』「其九 長恨歌と桐壺の巻」2022. 岩波書店
- (36) 中国語の言葉。実社会に出る、社会人として活動する。
- (37) 修身、齊家、治国、平天下(身を修め、家を整え、国を治め、天下を平らかにする)
- (38) 文章は道理を述べて思想を表現するためのものである。
- (39) 論点引用一桜井満『桜井満著作集〈第3巻〉万葉集の民俗学的研究(上)』「第1部 名義と成立一万葉集の誕生と中国文化」2000. おうふう
- (40) 論点引用一肖書文「日本文学中的物哀」. 2006. 華中師範大学『求索』
- (41) 出典一『白氏文集』卷十16「香炉峰下新ト山居草堂初成偶題東壁」(978番)
- (42) 引用一干野香織『美術とジェンダー—非対称の視線』「視線のポリテクス—平安時代女性の物語絵の読み方」. 2003. ブリュッケ
- (43) 玄宗皇帝は楊貴妃を喜ばせるために、好物であるライチを遠く離れた地・高州から取り寄せていた。晩唐詩人杜牧は、楊貴妃のためにライチが宮廷に届く光景を想って、詩を残した。「一騎紅塵妃子笑、無人知是荔枝来」。その後、上の詩に影響を受けた人々が、この地で栽培されているライチを「妃子笑」と呼ぶようになった
- (44) 中国語の言葉。起こらないことや出来事が存在したり発生したりすると想像し、それに酔いしれて楽しむ行為
- (45) 文書を校合する役職
- (46) 出典一『白氏文集』卷12感傷4「長恨歌」—君王掩面救不得(君王面を掩いて救い得ず)
- (47) 中国語の言葉。美人がそばで本を読んでいる場面。本は仕途、地位などにたとえることができ、女性は付属品であり、飾りにすぎないという意味である

参考文献

『源氏物語』. 2011.11. 角川ソフィア文庫・ビギナーズクラシック

- 与謝野晶子『全訳・源氏物語 1～5』。「桐壺」角川文庫。サイト：<http://genji.co.jp/yosano/yosano.html>
- 秋山虔、『新源氏物語必携』。1997-05。学燈社
- 山本淳子、『平安人の心で「源氏物語」を読む』。2014-06。朝日新聞出版
- 莊佩珍、『豊臣政権期の日本外交文書における「神道思想」の展開と革新』。日本宗教文化史研究。日本宗教文化史学会。編8(1), 71-91, 2004-05
- 西尾光一・貴志正造、『鑑賞日本古典文学』第23巻「中世説話集 古今著聞集・発心集・神道集」。1977-05。角川書店
- 上野英二、『「源氏物語」と「長恨歌」世界文学の生成』。2022-2。岩波書店
- 栗園園、『浅析「源氏物語」中的唐詩文学的投影—「桐壺」和「葵」巻中的「痛失愛人」』。2013。第7期。吉林省教育學報
- 竹内義友編集。雑誌『中国』第21号
- 神田秀夫。「白楽天の影響に関する比較文学的一考察」。1948-10。『国語と国文学』。東京大学国語国文学会
- 和辻哲郎、『日本精神史研究』。1926。岩波書店
- 丁莉。『「源氏物語」中的亚洲叙述：唐土、高麗与大和』。2014-12。外国文学研究。中国人民大学書報資料中心
- 蓑虫。『龍神楊貴妃伝』。<https://www.minomusi.net/youkihi/top.html>
- 千野香織、『美術とジェンダー—非対称の視線』2003-5。ブリュッケ